

二次元ドリームノベルズ

18
未 満



サンダークラップス! リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN ウオッチランド

羽沢向一
挿絵: 緑木邑

Contents

第一章
異世界に転生したら
ヒーローから勇者
004

第二章
恐怖に犯される
037

第三章
異世界勇者の
絶頂パレード
094

第四章
雲霞をなす陵辱
114

第五章
体液まみれの正義
143

スターサンダー

Star thunder

スーパーヒーローチーム
「サンダークラス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血
のミュタント。
電気を自在に操る能力を持つ。



ローズデバイス

Rose Device

「サンダークラス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷を負い、
体内にナノマシンを入れている。
今作では機械の甲冑「アレイアグレース」を装着して
闘う。



オセロット

Ocelot

「サンダークラス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な
美女。
南米の自然の精霊たちに認められ
たシャーマンで、精霊の力を宿し
てジャガーの獣人に変身して魔法
を使う。



フレア

Flare

「サンダークラス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ターに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。

ウォッチランド

Watch Land

巨大な城壁に囲まれた異世界の町。
来る災厄に対抗するため、ローズデバイ
スはここに勇者として召喚された。

サンダークラス!
CHARACTERS リボーン
ウォッチランド









目次

- 第一章 異世界に転生したらヒーローから勇者
- 第二章 恐怖に犯される
- 第三章 異世界勇者の絶頂パレード
- 第四章 霊體をなす随時
- 第五章 体液まみれの正義

第一章 異世界に転生したらヒーローから勇者

北原静子は銀座のカラス工芸品の老舗店の中を、時間をかけて歩いた。お気に入りの水色のワンピースに白い靴。左手には、いつものように若い娘にはあまり似合わない黒いアタッシュケースの取っ手をしっかりと握っている。今日はひとりで自分の部屋に飾る花飾を買いに来たのだが、目的の花飾だけでなく様々なカラス工芸品の華やかな様子に目移りしてしまっている。

(花飾の他に、なにか買おうかしら)
私室には仕舞いの電子機器と生活必需品しか置いていないのだが、カラス工芸品には幼いころから心が引かれる。コレクター気質ではないので、部屋に飾っておくのは二三個だからこそ、しっかりと選んで買いたい。特に並ぶ精巧なカラス工芸品のライオンや象など、アフリカの動物をなぞる。(ベルさんなら動物の置物を運ぶよね、あたしならこれ) 足が止まったのは、透明な大小の直方体をいくつも組み合わせたオブジェの前。同居している三人からほくわかないと言われるが、異象作品よりも抽象作品が好きだ。(ちよっと値段が高い、でも欲しい……)
財布にあるクレジットカードを使えば簡単に支払える値段だが、高級商品をホイホイ買うことには抵抗がある。脳内で数秒の躊躇をした後に、静子は決意した。
「よし、買っちゃおう！」

店員に声をかけようとしたとき、脳に情報が入った。静子の脳は、静子の意識とは別に無意識に飛び交う電子情報の中から必要なものを選び出して、意識に知らせてくる。意識にいくつものツイッターやLINEの画面が現れる。
(銀座で交通事故が起きてる?)
個人のスマートフォンがSNSにあげている投稿した情報なので、場所の判定ができない。静子はワンピースのポケットから四角いプラスチック製のサブライクを出し、店内の人たちから見えないように蓋を開けた。中に整列しているのはサブライクでも薬でもない、デントウムシサイズの小さな機械がいくせいに飛び立ち、人間の視力では捉えられないスピードで店先の外へ出ていく。道路に出た機械の虫たちはバラバラに分散して、銀座のあちこちを飛びまわり、映像と音声を集めて静子の脳へ送ってくる。

一分もかからずに、虫の一匹が事故現場を発見した。大型トラックが横断しになり、斜めになった両台のコンテナが白い乗用車を押しつぶしている。ドライバーのドライバーが自力で車外へ逃げ出し、道路で呆然と立ちつくしている姿が見えた。しかし乗用車のひしゃげた車内では、中年女性が外へ出ようと必死にうごめいているが、歪んだドアを開くことができない。
事故車に集まった虫たちの情報で、位置は把握した。静子は急いで店内の奥にあるトイレに駆けこむと、個室の中でスピードでワンピースを脱いだ。かわいいうんぴーすの下からは、身体にひびたりと響く黒いボディーツが現れる。指ではなく脳からの指示でロックを解除した。ひびきで開いたアタッシュケースの中から、エマルルド色に輝く金剛石が飛び出し、自動で静子の全身に貼りつき覆いつくす。コスチューム。数秒で、北原静子はエマルルドグリーンに輝くハイテク装甲服を装着したスーパーヒーロー、遠隔の装置となる。

二十歳前のハイティーンにしては小柄で華やかな静子の身体を包むアーマーは、静子よりも背が高く、金剛石で成熟した大人の女のボディラインを美しく描いている。顔も大人の女性をイメージした仮面に隠す。体形が異なるのは正体を消すためだが、おかげで世間ではオースティンは二十代なかばの美女というイメージを持たれていた。脳から自分の機械に直接命令を出せる静子は、オフビート。
オフビートとは世界にいない人間以上の、あるいは人間とは異なる力を持つ者たち。冷戦時代に、テロリストがアメリカへ向けて発射した核ミサイルを、ひとりの男が空を飛んで素手で捕まえ、宇宙まで運び、大勢の人々の生命を救った。

赤いコスチュームを着て、赤いマスクを被り、赤いマントをひるがえした超人は露骨のごっこ集まった記者たちへ、友人たちから超能力と呼ばれていると自己紹介した。スーパーオフビートの出現が契機となって、世界中で超人たちが姿を現しはじめると、人々は最初のひとりにならって超人たちをオフビートと呼ぶ。北原静子はエマルルドグリーンに輝くハイテク装甲服を装着したスーパーヒーロー、遠隔の装置となる。

超能力を使って犯罪をするスーパーウィランたち。そしてスーパーオフビートのように人命救助や犯罪者と闘うスーパーヒーローたち。北原静子もスーパーヒーローのひとつ。静子は幼いころに、優秀な科学者だった父の研究中の事故に巻き込まれて、次第に脳と神経が崩壊する奇妙な症状を発症した。陸軍に迫る死か命を譲るために、父親は自分が開発していた特殊なナノマシンを体内に注入して、娘の神経系を肩代わりさせた。静子の脳と神経は徐々にナノマシンに入れ替わっていき、やがて脳は完全にナノマシンの集合体となった。記憶や人格がナノマシンの脳に完全に引き継がれているのは奇跡といつてよい。

静子は身体が生身で、脳が機械、という他に類のないサイボーグとなった。父親の死後、静子は若い女性二人の新人ヒーローチームのサブライクと出会い、身を寄せた。そして自分が開発したアーマーを装着して、サブライクの四人目のメンバーとなり、オースティンというヒーローネームを名乗った。オースティンは身長が伸びていくにつれて、オースティンという名前と靴を入れたアタッシュケースを持ち、脚部からジェットを噴射してビルとビルの間を狭い空間を垂直に上昇した。周囲のビルよりも高い空中でアタッシュケースを手から放すと、中から四つのプロペラが現れて、ローンを化して自律飛行を開始する。

着替えの入ったアタッシュケースを車中待機させて、ローズデバイスは事故現場へと飛んだ。幸いにもトレーラーが機転しているのは、すぐ近くの道路だった。一分もかからずに、つづらけてある乗用車の脇に降り立つ。被害者を安心させるために、空いたドアのウィンドウから車内を覗きこんで声をかける。

「スーパードライバーチーム、サンダークラップスのローズデバイスです。今から救助しますので、心配しないで車内じっとしててください」

声はアーマーを通して、静子本来の少女のような途端な声から、頼りがいのある力強い声言に変わっている。運転席に座るほっちゃんとした中年女性は、何故か「ユースで活躍を報じられているヒーロー」の姿を見て、声を聞き、安堵で気の抜けた顔を大きくうなずかせた。

「はじめにトレーラーをどかします」

ローズデバイスは周囲を飛びまわる機械の虫たちからの映像を脳で受信して、危険がないことを確認すると、金属の両手を乗用車の上にのしかかるコンテナに出した。そのまま空中に浮かび、コンテナを押し、ローズデバイスのアーマーが出す腕力は、巨大な重量以上だ。難なくトレーラーを押し上げて、浮き上がった片側のタイヤをアスファルトの路面に積かせた。

「中年女性のいない助手席側のドアの前立つと、右手をアーマーの脇腹部分に当てた、なめらかな表面が開き、中からポールベンチイヌの細い刃が出た。指にくっつく。円筒の先端を空いたドアへ向けると、高速度で小刻みに振動する刃が出る。

「こちらのドアを切断します。安全ですが、念のために近づかないでください」

振動する刃がドアに触れると、包丁巨匠を切るようにやすやすと切断していく。ドアを車体からははずすと、両手を伸ばして中年女性のかなり重量のある身体を優しく引っぱり出して、道路に立たせた。

「けがはありませんが、すぐに救急車と警察が来ます」

救急車とパトカーが駆けつけてくる様子が、周囲に飛んでいる虫から送られてきている。中年女性はなほ呆けた顔つきで、ローズデバイスの金属のマスクを見つめた。

「だ、大丈夫です。あ、あの、スーパードライバーを生で見るのは、はじめてで、ありがとうございます」

パトカーが到着して警官が降りると、ローズデバイスは中年女性とトレーラーのドライバーを交えて、事故と救助活動について報告した。その間に野次馬がさらに集まって、スマートフォンで写真や動画を撮影しまくっている。ローズデバイスを呼ぶ声がいくつも重なって聞こえた。

「サンダークラップスのローズデバイスだ！」

「はじめで見た！」

「今日はひとなんだ！」

「かっこいい！」

「こっちを向いてっ！」

歓声を浴びるローズデバイスのアーマーの顔に変化はない。その美貌をシンプルに造形したマスク部分には、表情を変える機能はない。しかしマスクの内側では、静子の顔が困惑していた。

「えっと、やっぱり、皆さんになにか言うべきか」

スーパードライバーたちは事件を解決した後、集まった人々やマスコミに事件について話すことが多い。人々の不安を鎮めるため、ベテランヒーローになるためになる言葉をさりげなく言うのける。サンダークラップスではそういう役は、いつもリーダーのスターサンダーの担当だ。

「警官への報告が終わると、顔を人々へ向けた。」

「ええっと、その……」

ローズデバイスは無意識に大きく息を吸って行ける。

サンダークラップス！リポーン ウェッチランド

「皆さん、安全運転をお願いします」

そう口走ってから、自分で突っこんだ。

「なんなの、それ？！もつと気の利いたことを言わなくては」

ナノマシンが構成する脳のアタハースを検索して、過去のヒーローたちのインタビュー映像を高速で再現していく。そして決めた。それでは、さようなら！」

「お目覚めください、勇者様！」

ふいに静子の目はいくつももの音が入り、脳内に響いた。

「えっ？ なに？ あたし、まぶたを閉じてるけど、」

閉じた覚えのないまぶたを開くと、目の前に顔が並んでいる。ぼんやりとした視野に映るのは、見たことがない顔ばかり。全員が男、年齢は四十代以上から老人まで、ひとりとして記憶にない顔が、円陣を組むように並んで静子を見下ろしている。

「目を開けた！」

「目を覚ました！」

「勇者様が起きたぞ！」

「静子は大きく目を見開き、視界をクリアにする。」

「……これは」

自分の声が聞返りして聞こえる。喉の筋肉も、舌も、唇も、動きが重い。

「なに？」

自分が空を飛んでいるのではなく、硬く平らなものに横たわっていることに気づいた。急いで立ち上がったが、全身の筋肉も固まっていて、思ったように動かせない。まるで何日も眠っていたようだ。そのうち上体を起こして、ゆっくりと立ち上がったところで、あらためて自分がロースパイプのアーマーを装着していないことを認識した。

「アーマーを着けて、服屋の上空を飛んでいたはずなのに、どうしては自身の身体を見下ろすと、カラス工場で着ていたライトブルーのワンピースと白い靴に戻っている。アーマーもいない！」

全身を包んでいたアーマーだけでなく、空中でもちつちかむことだったアタッシュユークエスの存在も感じ取れなかった。目に見えないだけではない。アーマーとアタッシュユークエスは常に静子のナノマシンと脳とアクセシしている。静子の意図に反して他人が触れたり、移動したりすると、自動的に静子の脳だけに警報を発する。しかし今はアーマーとアタッシュユークエスとの接続が途切れている。アーマーを失った静子にできることは、手足を動かして脳の肉体的な記憶をほくすことだけ。そうしながら自分の周囲を観察した。

静子がいるのは、森林の木造の四角い大きな部屋だった。手入れは行き届いていないが、おしゃれなところはまったくない。百人以上は収容できる床には、木製の折り交わりの椅子がいくつも整然と並んでいる。

静子には古いキリスト教の聖堂のように思えたが、室内に十字架もキリスト像も聖母像もなかった。そのかわり一方の壁の前、奇妙な彫像が立っていた。身長が二メートルほどの、ヨーロッパの貴族らしい、立派だが、華美な装飾はない整った彫像を身にまとう四十代ほどの男の立像だ。肉体はたくましく、顔は優しい包容力を感じさせる。

静子を包囲している三十人あまりの男たちは、顔の造形も、聞かなくて済む言葉も明らかに日本人だ。それなのに身に纏っている衣服が日本人ではない。というよりも現代人のものではなかった。ヨーロッパの歴史映画や異世界ファンタジー映画に出てくる町の平民の衣装に見えた。そして今も静子に向かって、勇者様、勇者様、と連呼している。

「もしもここはセツト、あたしは知らないうちにロールプレイングゲームの衣装イベントに連れられたのかしら。いえ、そんな馬鹿なとはない。非論理的な」

静子をかこむ陣の中から最年長らしい白髪に白眉の老人が進み出て、つやややくひさますいた。顔の皺からあかされる歓喜を微妙な表情で抑えて、かすれた声を出す。

「勇者様、あなたが静子ちゃんに会えてくださいました。わたくしはウォッチランドの市長ゴドルフと申します。われわれの呼びかけに応えられたことを、心より感謝いたします」

敬意をこめて述べる老人の言葉にも表情も、静子は悪意を感じ取れない。警戒心を残しながらも家にたずねた。

「ここはウォッチランドというところなのですか？」

老人が真鍮の顔で応える。

「あなたの御名前は何ですか？」

「もちろん、勇者様という名を申せませうか？」

「あの、失礼ですが、あなたも、他の人々も日本人に見えますか？」

「勇者様の世界では二ホンという国があるのかもしれないかもしれませんが、わたたくしは存じ上げません。ここは自治都市ウォッチランドです」

ウォッチランドは、静子が全然記憶にない名前だ。地球上に存在する国名でも地名でもないと思う。

「でも、あなたたちの話している言葉が日本語です」

「それは勇者様がウォッチランドに召喚されたとき、互いに言葉を通じるようにされたのでしょ？」

「はい、そうです」

「言葉生活ではまず聞くことも口にもくぐりこまない言葉を真実語る老人の顔を、静子はまじまじと見つめ、あたしを別の世界に召喚した、と、いいますか？」

「われら市民は聖なる守護者アングル・ウォッチに願いました」

「ゴドルフ市長は右手を上げて、聖者の像を指し示す。顔にアノロフ時計をつけた人達が、この町の守護者になったのだ。近くウォッチランドを襲う恐るべき災厄から護っていただけという事実は受け入れ難い。自分だけが作られたセツトにいて、というわけが仮装イベントに放り込まれた、というほうがまだ信じられる。だが、ひとりの事実が、ここが自分の知る日本の中ではないと告げている。脳に通信がないにも関わらず、ネットに接続できない。ウォッチランドには電波がないわー！現代の日本の、いや地球の人がたくさんいる場所、人工的な電波がまったくないのは考えられない。科学的静電が、静子に自分がアーマーも情報も失ったら、あたしにはなんの能力もない。脳をナノマシンに入れ換えただけの一一般人なのに、異世界に召喚された勇者と言われても……」

ゴドルフ市長が立ち上がり、両手を広げて静子をかこむ人の輪を左右に広げた。アングル・ウォッチの教会の中に、扉へとつづく道がある。

「まあ、勇者様、教会の外で待つウォッチランドの市民たちにも健康を見せつけてあげてください。お、お、そうでした。わたくしはここが大変なことをおぼれてあります」

「トキッと静子はたずねた。」

「な、なんですか？」
「また勇者様の御尊名を受け賜わっておりますん」
「それは……」

どうしてためらうてしまふ。素性を隠して活動しているスーパーヒーローとしての反応だ。
この状況で、名前を明かしていいのから、でもここが異世界だしたら、この人たちはローンスパイイスを知らないから
決意して、本名を口にする。
「あたしの名前は静子です」

「それだけでなく周囲の人々がどうと湧き上がった」

「スズコ様」

「スズコ様」

「あれらが勇者はスズコ様だあ！」

「さあ、スズコ様。外で市民たちが、勇者様をお待ちしております」

静子の右手を、ユドルフが握った。何度もくりがえされる自分の名前のなを、市長に先導されて、静子は前へ足を進めた。何人も
の軍が我先に走って、木製の大きな扉を押し開く。

扉の外へ出た途端、大騒音が圧力となって押し寄せくる。静子の目に入ったのは、教会の前の石畳の広場にぎっしりと集まった男
女の群衆。老人から両親に抱かれた赤ん坊まで、年齢もはらたらが全員が日本人顔だ。

「勇者様！」

「勇者様！」

「勇者様が来くれた！」

「これでウォッチランドも安泰だ！」

さらにユドルフから静子の名が伝えられると、全員が口から連呼された。

「スズコ様」

「勇者スズコ様」

「スズコ様、われらをお救いください！」

「ウォッチランドを護ってください、スズコ様」

大勢の人々の言葉にあふれる希望の色を、静子は鮮明に感じ取れた。スーパーヒーローとして事故や災害の現場で救助活動をする
ときに、何度も聞いた音色だ。この異常な状況にあっても、ウォッチランドの人々の言葉は嘘はないと思う。

「でも、今のあたしが、どう応えてあげればいいのか？」
自分に向けられる大きな期待に困惑しながらも、静子は冷静にウォッチランドを観察していた。群衆で埋まった広場の周囲には、木
造や石造りの家が並んでいる。どの家も平屋が一階建てで、アンクル・ウォッチの教団が最大の建物だった。

見える限り、街のなかには、電線、街灯、自動車、列車、その他現代のテクノロジーを感じさせるものはない。やはり町全体が歴史
映画のセットのようにしか見えなかった。

しかし連なる家並みの間には、リアル志向の歴史映画には有り得ないものがそそえ立っている。

城壁だ。

遠くて細部はよくわからないが、石造りの城壁が町をかこんでいる。城壁の中に町がある城郭都市は、ヨーロッパでは珍しくない。
現代にもいくつも残っている。だがウォッチランドの城壁はサイズが異常だった。正確なところはわからないが、静子は建物との比較
で目測してつづやいた。

「城壁の高さは六メートルはある」

有名な方面の長城の最も高い部分でさえ九メートル。現存する城郭都市のなかでも最大規模であるフランスのカルソンヌでも、城
壁は十数メートルの高さ。高さ六メートルの範囲にそびえる城壁を建設する技術は、目の前のウォッチランドとは隔絶している。

「まるでオーバースタック」

静子は歓声をあげつづける市民たちへ、できるかぎりの大声で叫んだ。

「ウォッチランドの皆さん、すみませんが静かにお願いします。あたしの話を聞いてください！」

「あ、あ、皆さん、あ、あ、あ……」

いつもは完全に素の自分を隠蔽しているからこそ、堂々とスーパーヒーローとしてふるまえる。素顔と素声でヒーローじみたあつ
かいをされるべきが来るのは、想像もしていなかった。

「お願いします。あたしの話を聞いてください！」

人生ではじめて機械で増幅しない大声を二度三度くりがえして、ようやく市民たちが鎮まってくれた。歓声のかわりに、偉大な救
世主からこんなありがたい言葉を賜われるのかという熱い期待の視線が、レザの一番距離のごく近く飛んでくる。静子は自分の頬が
赤く色づくのを自覚して、うわすった声を出してしまつた。

「あ、あたしは勇者として召喚されたんですけど、事情がまったくわからないんです。皆さんのお役に立つためにも、あたしがない
のために召喚されたのか、具体的に説明してもらえないでしょうか？」

静子の前で再び市民はざわつつきはじめ。若者男女が顔を覗かされては、また視線を静子へ向けてきた。

「あ、あ、あ……」

今度はユドルフ市長が両手を広げて、民衆を制した。

「まあまあ、市庁舎の公文書庫にある記録によれば、代々の勇者も召喚されたときには何も知らなかったという、スズコ様」

いきなり大音量が轟き、市長の弁舌が吹き消された。

静子は驚愕の声をあげる。

「あああ……」

静子の目に映る広場の群衆と立ち並ぶ家々の向こうで、凄まじい光景がくりひろげられた。そびえ立つ巨大城壁の一角が、内側へ向け
て崩壊している。いくつも大きな石の塊が落下して、壁面に建つ家を押しつぶす。住民が広場に集まっていたいなければ、下敷きになつて
死人が出たかもしれない。

見る間に城壁の崩壊が広がり、次々と家屋が粉砕されていく。六十メートルの巨壁の一部がりの字の形にえぐられた。

壁の回りを削から崩れた箇所を乗り越えて、黒いものが姿を現した。黒い蛇のように長く伸びた首、黒い胴体から生えた四本の脚。そして背中から広がる黒い翼。静子は印象を口にした。

「ナノマン」

最初に壁を乗り越えたものは、確かにドラゴンの姿。大きさはトラックほどもあるだろうか。だがその後につづく黒いものは、同じ大きさだが主身にトゲトゲが生えたクワタムシに見える。さらに脚のある黒い怪魚。三つの首をもたげた黒い大蛇。ねじれた角が生えた黒い狼のような獣。

怪物の群れの姿ととも、ナノマンが今までウォッチランドに存在しなかった電波を検知した。

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

「ひびくひびく」

以外の情報を処理できるのも、ナフマンの脳のおかげだった。

レイブレスはその機能はない。VRのように目の前に映像が現れるだけだ。

その映像はレイブレスに関する情報が構成図と日本語の文字で現れ、耳に古日本語の音声の解説が聞こえた。

(あたしの動きと周囲の状況を判断して、レイブレスが最適な活動をするのね。特別な指示は声ではない)

眼前の映像から文字が消えて、広場に面した家を突き破り出てくる黒いドラゴンの頭部が映った。

闇を切り裂いたような光沢のない黒い頭、開いた口の中も黒く、黒い牙の列が並び、黒い舌が裏に隠れている。唯一、眼球だけが黄色く発光して、得体の知れない悪意を感じさせた。

「皆さん、下がってください！」

甲冑の中で叫んだ静子の声が、レイブレスから大きく響いた。台座をマントを振り、ドラゴンへ向かって跳躍する。高々と空中を翔けながら手足を動かすと、ほとんど抵抗は感じない。動きやすい最高のスポーツウェアを着ているような感覚だ。

「武器を出せ！」

つぶやくと、広場の石畳の一部がスライドした。開いた穴から剣が矢のように飛び出し、空中で軌道を変えて、柄が甲冑の右の脇手に収まる。

レイブレスが持つにふさわしい華麗な装飾が施された柄から伸びる剣身は、三メートルありある。通常の人間以上の身体能力を持つオブジェクトでもなければ、田舎の大男でも持ち上げることは難しい重量の大剣だ。

しかし静子は軽い格を握っている感触しかなかった。長大な剣の重量は、甲冑が巧みに吸収して、中の装飾者の負担にならない機構になっている。ローズハイスマーにも同じシステムがあった。

自身がついた瓦礫を四本の太い脚で踏みしめて、闇をひけた黒い胴体が広場に侵入した。

「このっ……！」

静子は剣道や剣術の経験がない。ローズハイスマーに内蔵した多数の武器を駆使して闘う、習っている護身術も、剣を使うことにはない。レイブレスは大重量の剣を腕上に振り上げ、真正面からドラゴンへ向けて叩きつけた。重さと遠心力は甲冑が引き受ける。狙いもレイブレスが補正してくれた。

剣身がドラゴンの盾面に突き刺さる。頭部が二つに割れ、長い首が縦に裂け、胴体の前半分が切り開かれた。

ドラゴンの動きが止まり、その場で倒れた。

裂けた胴体から血液は流れなかった。内臓もあふれ出ない。断面から見えるのは複雑に絡まり合う機械。

「ロケット！」

隣の家突き破って、巨大クワカラムが飛び出した。チェーンソーのように振動する二本の大剣が、レイブレスを扶もつて追いつく。

「飛んで！」

とっさに静子が叫ぶと、甲冑の足の下からジェットを噴射した。大剣が閉じる寸前にレイブレスが飛翔する。そのまま身体をひねり、回転して、剣をクワカラムの頭部と胴部の境目に叩きつける。

金属音を響かせて、頭部が切断された。広場に転がる虫の頭から金属の部品がばらまかれて、石畳がカンカッと硬い音を鳴らす。

「ドレッドホードはロケットなの？！」

ウォッチマンに侵入してきた怪物たちがロケットならば、突然電波を感じた理由もわかる。ドレッドホードたちが互いに通信し合っているのだ。

「は……！」

警報が降り、目の前の映像に背後の敵が映った。空から屋根へ向かって、黒い怪鳥が急降下してくる。

「だめっ……！」

レイブレスが大剣を投擲する。ミサイルのごとく飛んだ剣先が、巨鳥の胸を深くと貫く。胸から青い火花を噴き上げ、軌道を変えて石畳に頭から激突した。

「別の武器！」

静子が吐く、石畳の別の一面から、槍が飛び出した。レイブレスが走りながら槍をつかみ、空気を裂いて足の生えた怪魚へ突き刺す。

怪魚の口の眼球の間、穂先が突き刺さった。

「次の武器！」

倒れ伏した怪魚の腹を突き破って、鉄の塊じみた斧が現れる。長剣以上に人間に持てようのない巨大な斧を、レイブレスが軽々と構えた。左右から響いかつてくる黒い狼の三面の大蛇の頭を高速で駆けて、狼の胴体を叩きつぶし、大蛇の頭をすて破壊する。

頭上から落ちてきた大カエルをかわしたが、斧を呑みこまれた。即座に武器を呼ぶと、今度はハンマーが飛んでくる。柄を握った勢いのまま、カエルの脳天にハンマーの先端を振り下ろした。カエルの頭が深く窪み、左右の瞳孔から大きな眼球が飛び出して、コールドを引いて動かっていた。

静子は新たに現れた弓手にするく、鋼鉄の結のような矢を次々と上へ放ち、空を飛ぶ怪物たちを続々と射撃した。

矢をすて撃ちつくすと、弓を背後に担った黒いカマキリの胴体の側面に打ちつける。カマキリの胴体がくの字に折れ曲がり、その場で鎌を振り狂わせながら横倒しになった。

そして……

そして……

新たな黒い怪物の襲撃が途切れて、何かも過ぎた。見れば、広場には静子が破壊したドレッドホードの残骸が大量に散乱している。怪物がまた出現すれば甲冑が自動で知らせてくれるので、静子はひとまず倒した怪物を調べた。

生物ではなく、作り物なのは間違いない。見たところ静子の理解の外にある魔法の産物ではなく、科学技術が送り出した機械だ。

レイブレスといひ、ドレッドホードといひ、ウォッチマンの技術レベルをはるかに超えているわ。この世界では過去に高度な科学技術があったけれど、文明が崩壊して、忘れ去られてしまったのだから。だとするとレイブレスとドレッドホードは失われた過去の文明の遺産、あたしを銀座からこの世界に召喚したのも、魔法ではなく、次元を超えるほどの高度な科学技術かもしれないわ……

第二章 恐怖に犯される

ウォッチランドにある最も大きな酒場で、祝宴が開かれた。市民が誰一人として備つくことなく、ドレッドホードを逐ほした記念のパーティーだ。

静子はもしものことを考えて、酒場までプレイブレースを移動させることにした。

ローストバイスアーマーなら静子が装備しなくても、アーマーだけで目的地に歩かせるくらいは簡単にできる。

面倒なことにプレイブレースは中に人がいないと動かないとわかった。おかげでもう一度プレイブレースに入り、市民たちにかこまれて移動してから、酒場の中でまた脱ぐことになった。静子はすぐに装備できるように、自分の椅子の後に甲冑を立てた。

さらに自分でなくてもプレイブレースを動かせるのではないかと考えて、何人もの男に託してもらった。しかし静子以外の人が装備しようとしても、甲冑の背面は閉じてしまっ。受け入れるのは静子だけだ。

そうこうしているうちに祝宴の用意が整い、静子の前になみなみと酒が注がれた木製のジョッキがいくつも置かれる。「すみません、せっかくの厚意ですが、お酒は飲めないんです」

と、断つために、フトウのジュースで乾杯の言葉を取ることになった。店中の視線が集まるなかで、ナノマシンの脳をフル回転させて、らしい言葉を採る。

「えーと、麗さんのパースナバーティーのときは、麗さんが自分の故郷の盛衰の歌を延々歌って、ジャストイスサーカスのパーティーに招待されたときは、キャブアン・スカイさんがとてもいいことを言っていました……」

「あ、あたしも麗さんのお役に立つことができて、とてもうれしく思います。皆さんの無事を祝って乾杯です」

あたりざりのないが言えなかったが、ジョッキやマカブをいっせいに打ち鳴らし合う音色がにぎやかに反響した。

その後、人々がわれわれ祝いの言葉を叫び、感謝の言葉を捧げた。キターに似た楽器がジャランジャランとか言われる。小さい太鼓がいくつも打ち鳴らされて、勇者を称える歌が何度もくりかえされる。

大騒ぎのなかで、静子はドレッドホード市街やまわりの老人たちからウォッチランドの歴史を伝承を聞き出した。

「それらの……」

「わが家の祖先は、誰あつ……」

と、早くも酔いがまわっている老人たちのまわりくとい話をまどると、ウォッチランドがあるこの世界、住民が特別な固有言語で話しかけた『この大地』と呼ぶ世界では、大昔に大きな戦争があった。大國同士が魔物の軍団を戦い合わせた結果、古代の国々は滅びた。

老人たちが『破滅の大戦』と呼ぶ凄惨な時代のなかで、大勢の難民が難民キャンプ・ウォッチに導かれて、ウォッチランドにやってきました。アンクル・ウォッチは人々を導くために、ウォッチランドの周囲に巨大な城壁を築いた。

それ以来、難民の子孫がウォッチランドに住んでいる。普段は城壁にある城門を開放して、外の人々と交易をしている。そしてアンクル・ウォッチは姿を見せないが、今もウォッチランドを守護しているという。

ドレッドホードは、『破滅の大戦』に兵器として使われた多量の魔物の生き残りだといふ。今も群れをなして世界を徘徊し、各地で人々を襲い、大きな被害を出している。

ウォッチランドではドレッドホードが襲来する前に、アンクル・ウォッチが別の世界から勇者を召喚して来たのだ。

静子は何話目かの勇者だといふ。

やはりこの世界には過去に高い科学技術を持つ文明があり、戦争で崩壊したのね。ドレッドホードは野生化したロボット兵器、アンクル・ウォッチは人々を導く正義の科学生と推測できるわ。でも、別の世界にいるアーマーの使いに慣れた人間を見つけたら、次元を超えて召喚する技術は、あたしには想像できない。なにをどうすれば、そんなことが可能なの？」

静子の推測を外にして、宴会はついに。

そうして夕焼けも過ぎ、日が暮れ、ウォッチランドの上空に星々が輝いたころに、静子は疲労を理由にして、酒場の二階にある酒屋の一番良い部屋に入った。またプレイブレースを履き、ヘッドサイドまで進んでから、ワンプイスを脱ぎ、黒いボテイスーツだけにならしてベッドに潜りこむ。

あらかじめ勇者のためにあつたというヘッドは、心地よく眠ってきりあつたといふくらいに心地よく感じられて、きりよく就寝できた。

何時間、眠ったのだろうか。

爆音が轟き、窓からなれたれむ赤い光が寝室を染める。同時に新たなドレッドホードの通信を感じ取った。

ナノマシン脳が瞬時に覚醒して、静子はプレイブレースの背に飛びこみ、窓から飛び出した。

「こんな」

酒場の近くの町の一面が燃えていた。十軒あまりの家が轟々とらなる紅蓮の炎に包まれている。

炎の前に、黒いシルエットがそびえていた。

黒い馬にまたがった黒い甲冑。その頭部は黒い覆輪。

ドレッドホードではじめて自らに人型だ。黒い動物を巨大なデフォルメしたロボットたちとは違い、馬も、馬上の人間も、本物と同じサイズ。

「おまえが召喚された勇者だな」

「記憶を」

静子が叫ぶ。地面が二本の刀が飛び出し、プレイブレースの左右の腕、手に収まった。

覆輪が甲冑の右腕を捉えた。黒馬が口を開き、黒い煙の奥から紅蓮の炎が噴出して、プレイブレースの全身を包み、さらに背後の民家を燃え上げようとする。

全身を火炎にさらされても、甲冑の中の静子は温度の上昇を感じなかった。耐火機能は確認してある。黒馬が吐き出しつける炎をものとせず、覆輪騎士へと駆けた。

だが、火炎の向こうに見えたものが、静子の足を止めてしまふ。

髑髏の顔に、ドレッドホードではじめての黒以外の色があった。髑髏の眉間から上へ向かって深紅の太い線が伸びて、頭頂部近くで
もう一本の赤い横線と交わり、Tの文字を形作っている。
「黒い髑髏に血の色……まさか！」

静子の脳内データベースにある人物の姿が意識に浮かぶ。甲冑ではなく黒いラフターズツを着て、馬ではなく怪物じみたデザインの
バイクや自動車に乗っていた。対峙している誰かだが、過去の記録に残る黒い髑髏に赤いTを記したデザインそのままだ。
その怪人物に、静子は会ったことはない。静子が生まれる前に、すでに死んだとされてきた。映像記録や文章だけで知っている名前
を呼んだ。
「ヒュード」

馬からレイプグレイスを跳脱する髑髏が、逆剣を刺き出した口を動かした。鐘と同じように硬い金属製に見える髑髏だが、
柔軟に動いて、嬉々しい笑みの表情を作る。
「ああ、俺はテラーロードだ。俺を知っているなら、おまえも地球から来たな。レイプグレイスを装着して、なんの得にもならない
人助けをしているところを見ると、地球のスーパーヒーローに違いない。今も俺の名前がスーパーヒーローに伝わってるとはうれしい
ぜ」

「テラーロードが別の世界で生きていたなんて……」
テラーロードの名が、いやおうなく数々の理不尽で惨憺な事件の記録を浮かび上がらせる。脳に沈められている吐き
気を催す残虐行為の数々が、静子の心をかき乱していく。一般には公開されていないが、スーパーヒーローをしているおかげで見てし
まった写真や映像がたくさんある。
そしてテラーロードの名は、もうひとりの偉大な伝説のデータを引っぱり上げた。
スーパーオプビートがデビューした後、アメリカに数々のスーパーヒーローが現れた。最初のヒーローたちのなかでもスーパー
オプビートに及ぶ伝説を作ったのが恐怖の騎士だった。

テラーナイトは今もって庭に包まれたスーパーヒーロー。正体不明なのはまだしも、本心にオプビートだったのだからも悪見が分
かれている。明確な超能力を見せたことはないが、超機密な知恵と抜群の身体能力は人間を超れていた。一説には、スポーツや格闘
技のチャレンジが最優先に集中した状態を何時間も持続できたという。
スーパーオプビートが葬なき人々の希望と呼ばれたのに対して、テラーナイトは罪人への戒めと恐れられた。テラーナイトはけつし
て人を殺すことはなかったが、犯罪者たちの心に深いトラウマを残した。人を人とも思わぬヤングのボクサーや、良心を打ち合わせ
ていない詐欺師や殺し屋たちが、テラーナイトに出会った後は幼児のように怯えた。それこそがテラーナイトの超能力だともいわれてき
た。
日本でもテラーロードと名乗る人物が名乗った。

日本でもテラーロードと名乗る人物が名乗った。自分が製造したマシンを脱り、犯罪者を処刑するヒーローだと、自ら世間に喧伝した。
当初は犯罪者を殺すことを賞賛する人々も一部にはいた。しかしテラーロードはすぐにはヒーローではなく、自分が死に入らない人間
を殺す殺人鬼だと判明した。
日本最初のヒーローチームであるジャスティスサーカスに追われたテラーロードは、自分のアジトで自爆した。破壊されたアジト内
からバラバラの塊死体が発見され、テラーロードは死んだと確認された。
本心にテラーロードとしたら、見つかった死体は逃亡用に準備しておいた偽物……
静子は甲冑にたずねた。
「テラーロードが人間だと確認できる」

目の前にレイプグレイスのセンサーが検知したデータが表示される。様々な狂気が、黒い髑髏と鐘の中に、何者であるにせよ、生き
た人間がいると明示した。
レイプグレイスが両手の剣を握るそば、確実に甲冑の人間を殺してしまっ、相手は何人殺したか知れない人の皮を剥いたモンスター
であっても、静子には殺せない。
静子は剣を一本とも捨て、地面を踏んで、砲弾のように前進した。
（この手で、鐘から中の人間を引き出すしかないわ……）
鐘めく胸の両脇が、黒い鐘に届こうとしたとき、レイプグレイスが横置した。静子の動きをトレスして走っていた甲冑の手足
が、いきなり動かなくなる。

「あ……」
静子の驚愕の音が、甲冑の中に響く。鉄のついた金属の身体は止まることができず、前のめりに転倒して、水切りの小石のよう
に地面の土を何度もバウンドしていき、テラーロードが騎乗する黒馬の蹄の跡をかすめて、何メートルも転がり、背中を建物の壁に激
突させて、ようやく停止した。
普通なら重さを負うような大転倒だが、甲冑の内側を全身を包む柔軟な緩衝材のおかげで、衝撃は軽減されて、痛みを感じることな
なかつた。静子は素早く立ち上がりさうとうと手足に力をこめたが、なんの反応もない。ついさっきまで思いのままに動かせていた甲冑が、今では
は全身を拘束する道具としていた。
それでいて外の映像も音も届く。機械の黒馬が四本の脚を動かす。その場で反転して、黒い馬面をレイプグレイスへと向ける。
ドレッドホードの黒い髑髏が口を開ける様子が見え、刺き出した歯列の奥から出る笑い声が聞こえる。黒馬も黒い大きな歯を刺き出
し、二つの鼻の穴から炎を轟々と噴き上げた。
走るボースで固められて壊れしになった静子は、思わず甲冑の外にまで聞こえる声を出した。
「な、なにが起きたの……」
馬上のテラーロードが満足げに舌を吐いた。

「俺のオビエートの力だ。俺は機械の機能を操れる魔法使いさ。この力があるおかげで、俺もウォッチランドとは別の場所にある古代文明の遺産に、勇者として呼ばれた。見ての通り、俺はドレッドホードの野良口ポットたちの頭脳を支配して、勇者ではなく魔王になっちゃったぜ」

テラーロードの資料には、自作の乗り物や機械で人を狩り、殺した、としかなかった。今、静子は、テラーロードはもつと恐ろしい存在だと理解した。コンピュータのプログラムを自由に操るフットボールだ。

テラーロードがいた時代には、進んだコンピュータもインターネットもなかった。もし現代の地球にいたら、神のごとく世界を支配していたかもしれない。

「俺は以前にもウォッチランドに来た。この仮面ごとの姿ではなく、ただの行商人として街に入り、勇者を召喚するシステムと、プレイブレスの存在を知った。俺がプレイブレスを支配できることもわかった。それから楽しみに待ってたぞ。異世界から来る勇者と闘う日が来るのを。もとの世界では俺はヒーローともな敗北したが、この世界では俺がヒーローに扮つて、俺がヒーローをなぶり殺す！」

ウォッチランド中に轟けたばかりに高らかに宣言した後、テラーロードが声のトーンを変化させた。声に下卑た笑いがにじむ。静子が聞いた。焚かれた過去の肉声と同じだ。

「しかし、勇者が女なら話は別だ。女は殺すだけでなく、他の愉しみもたうぶりとあるからな。さあ、愉しめるかどうか、顔を見せな」

黒い鏡の右手が前に突き出され、開いた指をキキョと握った。

「あつー」

甲冑の手足が勝手に動き、プレイブレスがなめらかな動作で立ち上がった。倒れる前までは静子の動きを甲冑がトレースしていたが、今はプレイブレスの動きに静子が強制されている。

「外へ出して」

静子が命じても、背面は動かない。そのままずたずたと歩き、馬上のテラーロードの脳で立ち止まった。

プレイブレスの面頬部分が上にスライドして、兜の中に収納された。全身を包む暖ひやかな甲冑から、静子の顔だけが外気に燃れ、黒い鏡の眼球のない眼孔にさらされる。鏡のマスクの中の目が、じつくと勇者の姿を観察して確認みしているのを、静子ははつきりと感ぜさせた。

聞っている最中に犯罪者に素顔を見られることは、静子は派手でない。こつこつとときにスーパーヒーローはどんな表情をすればいいのか、正直なところ困惑してしまつた。どうにか怒りをこめた顔を作つて、鏡をならみ返した。

「聞いたな、プレイブレスの中の勇者は子供か」

「子供が美人だ。気に入らなぞ。充分に愉しめる。こんなかわいい顔だとスーパーヒーローとして迫力がないな。ヒーローのとき、コスチュームのマスクで顔を全部隠しているのか。おまえの父親はなんだ。ヒーローネームと本名を教えろ」

静子は顔を聞かされて驚かされた。

「俺には教えられないか。まあ、当然だな」

「俺は世界の人たちならまだしも、同じ世界の犯罪者に名前を教えるわけにはいかない」

「……あつー」

テラーロードの右手の指が、プレイブレスの指をつかんだ。そのまま棒立ちのプレイブレスが持ち上げられる。

「……あつー」

普通なら首が締まって、息がつまるころだが、甲冑が壊れてくれる。静子は痛みも感じず、呼吸も変化はないが、なんの抵抗もできずに最低の人数のように吊るされる気分は最悪だ。怒鳴るのではなく、静子の声は冷ややかになった。

「起つてきなさい」

静子の言葉を無視して、テラーロードの鏡のマスクから出る声の音量が一気に大きくなり、人間の音量を超えてウォッチランド中に響く大音量を化した。プレイブレスで耳を塞がられていなければ、静子の聴覚が危険だったかもしれない。

「ウォッチランドの住民はよく聞けつ！ 隠れている家から顔を出せ、俺を見る！ 誰も顔を出さなかったら、家に火をつけてやるぞ」

仲間が響き返り、やがて家々の窓や路地の角から何人も静が覗いた。

赤い丁の紋章を額に記した黒い鏡が、市民たちの顔をゆくりと見まわす。

「俺はテラーロード！ ドレッドホードの支配者だ！ 勇者が敗北したんだから、本来ならば伝承の通り、おまえたちをドレッドホードに皆殺しにせよと命令した。だが俺は勇者を捕らえたことで逃している。おまえたちを殺すのはやめておいてやる。ただしウォッチランドの城壁の門は閉じられた。ウォッチランドの外逃げよう門に近づいた奴は、門前に置いた罠の爪で引き裂き、牙で噛み砕き、炎で燃やしてやる。そして……」

テラーロードが腕を振りまわし、プレイブレスを糸の切れたマリネットのように揺らした。町をそこかしこから叫び声があがった。

「ハズク様」

「ハズク様」

「ハズク様」

「ハズク様」

「ハズク様」

「ハズク様」

「ハズク様」

舌を出して、自分から先端をテラーロードの舌に触れさせる。人体でも最も敏感な感覚器である舌に、不快極まりない感覚が漫みこんでくる。テラーロードは口内のゲアをまんことしていたらしく、口奥は全く舌も汚れていない。それでも気持ち悪くてしかたなかった。

「……」

標とは当然のようにティーパーキスを何度もしている。要するに舌を嚙める行為は、陶酔するほど心地よい。理想では似た感覚のはずなのに、ちも吐きそう……

「……」

舌を口外に出しているのに、明らかな唾液をしゃべられるのは嫌だ。静子は頬を引きつらせて、相手の舌を舌の裏で挟む。犯罪者の肉厚な舌が口内に居座ると、腐敗した汚物を押しこまれた気がする。今すぐ吐き出す衝動を懸命に押し止めて、自分の舌を敵の舌に絡めて、チューチューと言を嚙らして吸った。

「……」

「気持ちいいぞ、若い女の舌は最高だな。女のスーパーヒーローの舌はもっと最高だ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

サンダー クラップ ストリート ウェットランド

舌を出して、自分から先端をテラーロードの舌に触れさせる。人体でも最も敏感な感覚器である舌に、不快極まりない感覚が漫みこんでくる。テラーロードは口内のゲアをまんことしていたらしく、口奥は全く舌も汚れていない。それでも気持ち悪くてしかたなかった。

「……」

標とは当然のようにティーパーキスを何度もしている。要するに舌を嚙める行為は、陶酔するほど心地よい。理想では似た感覚のはずなのに、ちも吐きそう……

「……」

舌を口外に出しているのに、明らかな唾液をしゃべられるのは嫌だ。静子は頬を引きつらせて、相手の舌を舌の裏で挟む。犯罪者の肉厚な舌が口内に居座ると、腐敗した汚物を押しこまれた気がする。今すぐ吐き出す衝動を懸命に押し止めて、自分の舌を敵の舌に絡めて、チューチューと言を嚙らして吸った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

サンダー クラップ ストリート ウェットランド

その思いも、顔がテラーロードの股間に接近すると消し飛んでしまう。眼下に入る男根はいまだに勃起していない。静子を振り、機械あつかいでちてあそんでも、つたれる亀頭をソファの表面につけたままだ。
「このまま男のモノを口に咥えられらる……」
静子は当然の予想をして、あっさりとはずれた。

「ええっ」
身体が肉棒と亀丸を横目に見て、静子の顔はテラーロードの下腹部から右部の内腿へと滑った。膝を越えて、舌と唇と亀先をすね毛でこすられながら、足の甲へと進む。ついにはプレイグレースが手足を屈して、伏せを命じられた大のように床に這いつくばされた。
「俺の足の指をしゃぶれ、フェラチオの要領で、一本一本丁寧にやるんだぞ、ちゃんと種唱しろ」
「はい。静子は足の指をしゃぶります……」
「そうだな、小指からやれ」
テラーロードが右足を突き出し、中指の先を静子の鼻に押しつけた。力はこもっていないので痛くはないが、鼻の硬を押し上げられた。

「はははは、美少女スーパードローが膝っ農になつたぞ」
「こんなふざけた嘲笑に反応するのは無駄だわ」
静子は鼻を押し上げられながら舌を伸ばして、小指の裏側に這わせようとした。
「指の裏に這がついてる！ これを舐めるなんて！ でも足の汚れを指摘しても、やっぱりテラーロードを喜ばせるだけになってしまっ
う」
我慢して小指を舐める。舌の表面に埃がくっついて、口の中に入ってくるが、気にしてられない。

「むっんんん、んくっ……」
舌を小指と薬指の間に差し入れて、指の表側を舐めまわす。爪の本当の硬さをほじめて知った。
「ビチャ、ベチャ、又チユ……」
濡れた舌をたてて小指全体に唾液をまがしていると、頭上から声が降ってくる。
「フェラチオの要領でしゃぶれと言っただろうが、指を口に入れた」
先陣から指の付け根まで、口の中に言んだ。

「吸え、強く吸うんだ、返事しろ」
「ひやい、しずゆが強く吸ひます」
舌をすぼませて、思いっきり小指を吸引した。
「ジュルッ！ ジュルル……チュル」
情けない音だが、自分の身体を伝導して聴覚に届く。

「いいぞ、初心な小娘みたいな顔のくせに、なかなかフェラチオが上手いな、やっぱり今でも女のヒーローは悪党のモノをしゃぶら
されてるのか？ 俺の時代のジャスティスサーカスのアイドル、白鳩みたいにな」
「それはあなたが、んくっ……」
思わず小指を吐き出してあげた舌が、口に突こまれた親指にせき止められた。

ホワイトレジョンは、ジャスティスサーカスの創設メンバーのひとりである女性スーパードローだった。当時のメンバーのなかで
は最も若い彼女が、五人のオポジット知事者グループを倒すべき五人に選ばれる運命に陥れた事件は、日本における女性ヒーローが悪人に
犯された最初の事例とされている。テラーロードはそのフォーミュラブルファイブのひとりだった。
「サービして、間を抜かして親指をしゃぶらせてやる。じっくりと舐めて吸え」
テラーロードの勝ち誇った言葉を聞いて、静子口内を小さく親指に舌を絡めながら、腕の内側でこぼやいた。

「あの事件のすぐ後に異世界に行ったあなたは知らないだろうけど、ホワイトレジョンは「ロー」をついたわ、引退した今でもジャ
スティスサーカスの予備メンバーの員として、非常時には駆けつけて、人々を助けている。ホワイトレジョンに比べたらこれくら
いのこと、なんでもない」
決意を新たにして、強く親指をすする。

「ジュチャッ、スウル、ジュムムワ……」
「よっ」
突き入れられたときと同じに親指が舌裏に引かれた。硬い爪で舌の内側をひつかかれて、鋭い痛みが走る。

「くっ……」
舌と外に出た親指の間に透明な唾液の糸が伸びて、ふっふっとなにに滴った。舌を濡らす自身の唾液を飲んだらともではないまま、静
子の口の中にテラーロードの左足の親指を突っこまれる。

「んくっ……」
また口内が親指でいっぱいになった。静子は意地になって舌でレレルと舐めまわし、強くジュムムムを吸いたたててやる。

「んが……んくっ……のっんん……」
「いいだろう、指はそこままだ。いい準備運動になつただろう、いよいよ俺の男のモノを味わわせてやるぞ」
プレイブレスが動き出した。屈した手足が伸びて、静子は膝違いから膝立ちの姿勢にされて、顔の前にテラーロードの股間が位
置した。股間を垂れ下がったペニスと亀丸が埋めている。

甲冑の両手は、テラーロードの左右に開いた太輪に置かれた。
そこから両手は掲げられたように動かなくなった。甲冑に囚われた静子には動かせない。
困惑する静子の顔を、テラーロードが見下ろす。
「最初は舌を舐める」
「手を動かさないで待てな」
「だめた、手を動かすぞやれ」
「どうでもいんですか」

「ヒーローなら自分で工夫しろ。ウズクズしてても、向こうのほうが先に工夫しちゃうぞ」

「あ、あああ……あんん……」
胸毛に隠られる静子の真正面に、テラーロードのやつく胸腺が来る。またもキスの距離だ。

「ああ、なにをさせてもつちりなの……」
甲冑の両脚が床を離れて、テラーロードの腰を挟んだ。静子の身体はマッチョな裸体を支えにして空中に浮いた状態になる。まるで
きりこカリの木にしがみついているコアラになって、静子は紅潮した顔を左右に揺らした。

「うっっ、うんんっ…… はあああ……」
胸毛に責められる胸に加えて、淫靡粘液に濡された女性器を裸毛でチクチクつつかれ、想定外の快感が満ちた。

「ああ、この体勢は……」
静子のナマシンの脳のパタータヘースに野めこまれた本人には必要のない知識から、『暴弁スタイル』という言葉が画像が出てくる。
自分がまさに画像通りの姿になつていてと自覚してしまった。

「静子が自分で俺のモノを啜えて……」
「この体勢で、いったいどうやって？」

「手足をゆるめて身体を下げる。勇者の甲冑が上手く手伝ってくれる」
しかたなく手足の力を必しずつ抜くと、今回はフレイングレスの抵抗がなく、身体がすり下がった。乳房と女性器が密林と
こすれて、股腺がびくびくと揺れる。

「くっ……」
胸腺がすり下がる。甲冑のシステムが動きを補正して、開いた肉花の中心にある膣口に亀頭がひたりと当たられる。

「ひっ……」
それだけで強制的に準備させられている下半身に、ヒリヒリと大きな快感のバルスが走り、甲冑の中で背筋がわななく、四肢から力
が抜けて、股間がさらに落下して、膣口が押し広げられる。自身の重量で、ヘースが本能に付け根まで膣の中に侵入した。

「あっひひひひひひ……」
淫靡粘液を強靱な亀頭でゴツゴツした肉腔にえぐられて、静子を首んでいた疼きが消え飛んだ。体内に感じる齧刺が、そのまま口から
淫靡になつて飛び出る。

「おっ！ 大きいっ！ ひああ！ きついっ……」
酒漙した疼痛のかわりに、肉悦の轟音が炸裂して、体内に高々と火花が吹き上がる。

「あっあああうっ…… だめええ……」
静子の手足が脱力して、プレイブレスの装甲がテラーロードにしがみつき、身体が揺れるのを防いだ。静子は唯一自由に動か
せる首を左右に振りたくり、悲鳴ごとくに飛び散る唾液が向かい合う黒い鬚を点々と濡らしていく。

「黒い鬚列が上下に開き、中の間から伸びる舌がふりかかった唾液をへりりと舐め取った」
「ははは、髪だが静子は処女ではなかったな。今の悪党に犯られちゃってたか？」

「そんなことは、くっ……、はっ、はあああ……」
テラーロードが硬そうな大殿筋をキユと引き締めて、静子を責めく腰を一度だけ斜め前方へ突き出した。静子は全身がカクンと大
きく揺さぶられて、頭をのけぞらして甲高く叫ぶ。反射的に膣肉が強く収縮して、打ちこまれた勃起ヘースを握りしめ、自分自身をこ
つなく責めだててしまふ。

「胸腺が歪み、不気味な歡喜の表情を作った」
「おお、静子は中も供めたいだな。おっそろしく狭くて、キユキユウと締めつけてまがる。すっごく気持ちいいぞ。静子も好き
なだけ尻を揺って、メスの快楽を責め！」

「テラーロードの身体が動かないまま、甲冑の手足が巧みに動き、静子の身体はゆっくりと持ち上がった」
「はうっ！ 動く！ 抜けるうっ……」
自分の意志を無視した動きで、膣口からゆったり肉腔が出ていく。淫靡にうながされて分泌した静子の唾液で濡れた肉腺が、秘乳
の線をめくり上げるようにしてゆるゆると姿を現した。

「ひひひひひひ……」
ヘースの速い動きが、淫靡液に浸った内腺を引き出されるように感じられて、愉快の火花が連続して吹き乱れる。

「亀頭だけを内側に残して肉腔がすべり外に出ると、またゆっくりと静子の身体が降下しはじめ。今度は逆に体内の奥へと強烈な正
力が押し寄せ、全身の毛皮から肉悦のキユキユウがどどどと湧き出る思いがした」
「やあああ…… こっ、こんなの、おかしくなるうっ……」

「たまらんだらう、カンカンさうこむだけじゃねえ、このゆるゆるした動きがいい。たっぷりと時間があるから、じゅくりと愉し
む……」
再び女性器が肉腔の付け根に到達する。体むごとく静子の身体が上昇した。またプレイブレスが腰にうねりを加えて、螺
旋を推くようにして昇る。新たなペナルが新たな刺激を生み、鮮烈な快感を連続していく。

「まやうっ！ ふあっ！ はきゅんんんん、つぷっ、むっ……」
「あ……、うんべいふうふう……」

「あ……、うんべいふうふう……」
ディープキスで口と喉を封鎖されたが、身体がうねり、上下して、膣内をねちねちと滑られつつける。淫靡の効果なのか、テラー
ロードの唾液が食道を流れ落ち、胃に取まると、腸胃から与えられる快感がより大きくなり、ドリルのように身体の中をキリキリと
貫かれる。

「むっ、ちゅっ……」
「んんん……」

「静子の口に舌を挿入したまま、テラーロードが淫靡した」
「んんん……」

「イヤ、イヤ……」
「イヤ、イヤ……」

胸の内で叫んでも、静子は自分が限界だと感じる。淫靡に侵襲されて、性感が何倍にも鋭敏になり、ゆったりとロマンチされている
だけで強烈に絶頂へと追いつたてられている。

進行される人々の状態で、黒馬の右側に並んで歩かされた。今はフレイブレースに動かされているのではなく、静子の意志や申言を動かしている。だが広場の地下に格納されている武器を呼ぼうとする反応はない。なにやらテラーロードに反抗すれば、市民列に下レッドホードたちが襲いかかり、車アングル・ウオッチを大団の道になると言われた。

「ウオッチランドの人々になにをするつもりですか、いたぶるの。あたしにだけいいでいいから」
話しかける静子に、テラーロードの黒馬が笑いかけた。
「住民どもにはなにをするつもりはないさ。こんな平凡な奴ら殺してもつまらんからな。俺は見せてやりたいだけだ。自分たちの勇者がさらす静子か、いさをな」

黒馬が脚を止めた。静子も歩みを止めると、すぐ前に立つコトル市長が、獲せた喉が破れせんばかりの絶叫をあげた。
「シスコ様！ わたくしは信じておりませう！」
コトルのすぐ後ろに立脚した者が、あわてて市長にしがみつき、口をふさぎだした。
「市長、おやめください！ テラーロードの怒りを買って殺されますぞ、まっせあつ！」
前衛で男の指を噛んでおろぼとく、老人は声をほらほらに口をふさぎだした。

「アングル・ウオッチに運ばれた勇者が、敵に敗北するはずがない！ 必ずやこの外道を倒してくださるに違いないイイイイッ」
アングル

最後は声が引きつり、かすれて、死にかけの獣の嘶も化して、老人の救命の叫びも、テラーロードの哄笑にかき消される。
「はははははは、勇敢だな、じいじ、だが古いほれがキャンキャン吠えても、なんの意味もないぞ、今から、おまえたちの勇者が恥をさらすシーを開催だ、まずは勇者のおつぱいアングルを拜ませませう」
テラーロードが右手の鎧を引くと、静子は事前に命じられた通りに、黒馬の前に進み出る。教会広場を出て、ウオッチランド市長が左右に並ぶ大通りの入口に立つた。

それだけで人々たちからため息があがった。そしてため息はさらに大きくなる。
「フレイブレースの顔面と下腹部に、左右の本腰の装甲が一度にはずれて、路面にカシャン！ カシャカシャン！」と宣告された。昨夜と同じように、静子の胸と恥丘と大股が露出する。まっせあつなつのかくらみ、上品なビンの乳輪と遠慮がちに締りまる乳首、ふくつくした恥丘に刻まれて、硬く隆起した陰茎、ウオッチランドの住人たちに、勇者がまだなにも知らない少女と印象づけられる裸体だった。

この演出のために、テラーロードはわざわざフレイブレースをもとに戻して、ピカピカに磨いたのだ。まはやく種く金属の間から色白のなめらかな肌が現れている姿は、ミスミツチなコントラストを置いて、艶めかしさを生み出している。
両手を後ろ手に拘束された静子は、胸も下半身も隠すことはできない。できるのは少しでも見える部分を減らすと、両脚を強く閉じて、内股を露出なく隠蔽させるだけだ。

「へい……」
過去にも犯罪者に陵辱された経験はある。女性スパーヒーローの宿命ともいえる。しかし大勢の群衆の前で裸になるのははじめて。全裸ではなく、痛情的な遊ビキターマースタイルなのががいそう情けない。
「ああああ、恥ずかしい……はやく死にませう……」
多くの人々がまぶたを開いて、静子の半裸身から顔をそむけている。コトルもそのひらいたが、白髪頭を大きな鉤爪がつかんだ。背後に立つ黒い機械の熊が、右腕を市長の頭にのせている。

静子はあわてて声をあげた。
「皆さん、あたしを見てください！ そうしないまま殺されてしまいます！ あたしのことを知ってくださるのなら、しっかりと見てください！」
「勇者様が自分の裸を見てと言っているんだ。見ないアングル・ウオッチ様の神罰を、俺が下すぞ！」
背後から罵ってくるテラーロードの言葉を聞いて、静子はさらに声を大きくした。

「お願いします！ あたしの裸を見てください！」
叫びながら静子は足を踏み出し、自分を見つめる人々の間をそそろと歩いた。左右が必死にせられる視線は、欲望ではなく死への恐怖と勇者への憐れみに満ちている。
「あ、フレイなら、スパーサンダーなら、オセロットなら、他のスパーヒーローたちなら、どうして俺に話しかけてくれないの……」
静子は歩み止めた。背後からテラーロードが怒罵する黒馬が、金属の蹄を鳴らしてこいてくる。ウオッチランドの中心から車の騒門までまっすぐ伸びるアングル・ウオッチ大通りを、全住民と敵と助手を見せながら歩み止めた。

今は閉じられ、門をかけた車城門の前に来ると、静子は首輪の鎖を強く引かれて立ち止まり、回れ右をした。
「歩み止めたら、囮りは俺のネットに乗せてやる」
城門近くに並ぶ市民たちから絶叫があがった。人々の後ろで家が半壊して、黒い巨体が出現する。あわてて逃げる男女の間を抜けて、機械の大輪が大通りに躍り出た。

「えっ……なに？」
こんなものが用意されていたとは、静子はテラーロードから聞いていなかった。幸い死人も負傷者も出なかつたと安心する間もなく、フレイブレースの背中を機械の猪の牙に引かれて、空宙に投げつけられる。まるで計算した曲芸だとうように、静子の身体が一回転して、刺さし尻を猪の背に乗せた。両脚を大きく開いて、猪の背にまたがった体勢になつてしまふ。

「どういっつもの、ああ……」
静子の開いた股間のすぐ前に黒光りする人工の男根が出現した。猪の背中から生えたのは、先端にたくましい亀頭の形状を備えた、ディルドーと呼ばれるペニスを模した道具。太さは昨夜のテラーロードの勃起と同じだが、長さだけは短かっている。
亀頭の先端から、猪の背にたががる根もとまで、ヌルヌルと黒くぬめぬめついているものは、間違いないく昨夜浴びせられた縮薬枯液。

「そんな……」
静子は口を開き、両足に力をこめた。両手が走らないので、猪の上で膝立ちの姿勢にならうとする。こんなときだけフレイブレースが動きをサポートして、脚の動きを安定させたので、しっかりと身体を支えて前へ移動することができた。



テラーロードがまた鎖を引き、猪がエクスタシーで興奮する静子を乗せて跳ね進む。一度開いた口と喉はもう閉じられなくなり、スパーヒローにも勇者にもあるまじき罵詈が止めどなく押り出されてしまふ。

「はひひひい！ まだイッてるのに、うっ、動いたらあ、ひゃひひひいッ！ もっとイッちゃろうッ！ イクイクイクウウウッ！ ツッ！！」

恥辱の行進がつつき、静子は絶頂の上に新たな衝動を積み重ねていく。猪が脚を踏み出すたびに、静子の股間から湧出する愛液が、路面に落ちる。

「またイクッ！ イクの止まらなひいッ！！」

「もっと興奮がイク姿を見てもらえよう、静子からみんなにお願ひしないか！」

テラーロードの叱責に、静子は不自由な体を揺らして、随筆の汗に濡れた美貌を右に左に向けて、男に、女に、子供に、大人に、老人に、よがり再混じりの懇願をしていく。

「はっあああ、お願ひです！ おひひい！ イクウッ！！」

「フシャア……ッ、ドフトフー」

「どうが、静子がイクとエズを見てたまひい！ イクんっ！」

「あっおおお、見て！ 静子がイクのを見てええッ！ またイクふああ！！」

「シヨフッ！ ドビュウウー」

「シユババババ……ッ」

「シユババババ……ッ」

「……え」

静子は猪の背から落ちて、路面に座っていた。目の前には一度見たウォッチランドの東の閉じた城門がある。猪に寄せられたまま何往復したのかわからないが、とにかく街の車の端に居た。見まわすとまわりにはいる人間は、馬がかりで立ちテラーロードだけだ。車アングル・ウォッチ大通りに並んでいた住民の姿はない。

「ウォッチランドの道中は、町の反対側を集めてある。ここから先は、奴らには見せられないからな」

テラーロードの饒舌の無い音がヤリと笑う。體の中から出る声も、静子を誘導してるときとも異なる上機嫌な音色だ。

「こんな言い方は変だけれ、なかなかサイプレスハーティを、秘密にしていた相手に知らせる道前みたいだわ」

テラーロードが城門に近づき、閉まった扉を固定する木製の筒を両手でつかんだ。大人が数人がかりでやっとなりつけられそうない角材を、軽々と門扉からはずして、大通りへ投げ捨てる。門扉が外へ向かって押し開かれた。

静子は鎖を引っぱられて、城門の外へ、堅固な城壁にかこまれた城郭都市ウォッチランドの外へ向かわされる。城門の外に出た途端、洪水のように噴霧が流れこんで来た。

「……」

ナノマシン脳が電波を受信している。ドレッドホードの通信ではなへ、もっと大量の通信が飛び交っている。一口がりに浴びる電波の洪水は、最初に衝撃だったが、すぐに意識から締め出された。

「霧波にも驚いたが、目の前にある草にはさし、驚愕させられる。」

「コ下ルフ市街をはじめとする町の人々に聞かされた話では、ウォッチランドのいつかは開いている城郭の外には、整備された街並の伸びて、城郭の周囲には青々とした草原が広がっている。草原にはきれいな川が流れ、近在の農民たちが開墾した畑が点在する。遠くには森林が際り、遠くの山々へつつく。」

「はじめてウォッチランドの外に出た静子が見たのは、のどかな田園風景ではなかった。広がる大自然でもなかった。東アングル・ウォッチ大通りでは頭上にあつた青い空で、白い雲も、輝く太陽も存在しなかった。」

目の前にいるのは、そびえ立つ巨大な何か。

高さが六十メートルはあるウォッチランドの城壁よりも高いもの。

ナノマシン編が高さ八十五メートルあまりと計測した。二十数階建てのビルに近い高さだ。

あまりの大きさに最初はなんなのかわからなかったが、静子は独特の形に見つけた。

「に、人間……身長八十五メートルの巨人！ なんなの!! 作り物の巨人像!!」

「突然とする静子の耳に、テラーロードの笑い声が入った。」

「ははははは。あいつは正義止路の人間さ。」

静子はスーパーヒーローとして、通常の人間よりも大きなオビートと相対することもあった。それでも最大は自身を五メートルに巨大化させた犯罪者だった。高層ビルのような巨人は、静子を知る過去の記録にもなかったはずだ。また別の世界に来てしまったのではないかと思い、背後をふりかえると、すぐ後ろに閉じた木製の城門と石造りの城壁が存在している。間違いないウオッチランドから外へ出たことだ。

「それなら、町から巨人が見えるはずなのに!? この場所はどこなっているの?」
足の下は土ではなく、灰色のなめらかな金属だった。
巨人の脚上のはらが高みも、青空ではなく、やはり灰色の物質が覆っている。
かたわらに立つテラロードには驚きの様子はなく、うろたえる静子をながめて楽しんでいた。この異様すぎる言葉を、当然のこととして受け取っているようだ。
「あわてなくても、何が起きているのか、あの巨人がいやでも教えてくれる。」

「どういって、あつー」
テラロードの口から、舌を前に出して、静子の首筋がブラックアウトした。
体感ではほんの一瞬後に、目の前が明るくなる。
「ええっ!」
すべてが変化していた。

隣にいるテラロードが子供用の人形のように小さくなっている。
八十五メートル以上あった巨人も縮んでいた。ナマシンの計測では八・五メートル、十分の一に縮小している。今でも十分に大きいとはいえず、サイズダウンしてはじめて気づいた。
「アンクル・ウォッチー」
巨人は教室の中に置かれて、中にフレイググレースを秘蔵していた聖者アンクル・ウォッチの銅像にうりふたつ、違いはサイズと材質だ。

目の前のアンクル・ウォッチの銅像は、間違いないと生きている人間の肌。銅像にそっくりの四十代らしい顔には、威厳と優しい包容力を備えた笑みが湛えられている。しかし作り物ではなく生身の人間の顔として見ると、人格の良さをわざとらしく強調したように感じて、静子はなんともいえない唾くさを覚えた。
顔の左目の位置にある円形のアナログ時計は、銅像と違って秒針が動いていた。長針と短針が指す時刻も、銅像の九時ちょうどはずれている。

身にまとっているのは、銅像と同じデザインの立派だが簡潔なデザインの上着とスポンと靴。衣服は布で作られて、色はどれも白い。なんとなく白衣を真実座にアレンジしたような印象を与える。
静子は困惑しながらも、ウオッチランドの守護神への敬意をこめて、巨人のアンクル・ウォッチに声をかけた。八メートルも上の耳に届くように大きく張り上げる。
「あなたはアンクル・ウォッチなのですか? ウオッチランドを護るシステムを造った古代の科学者でしょうか?」
見上げる先で、大きな顔がニッコリと慈愛あふれる笑みを作った。

「その通り。私はウオッチランドを創造したアンクル・ウォッチだよ。ようやく再会できたね、勇者シズ」
「えっ? 再会とはどういうこと、あつー!」
八・五メートルの巨額が膝を折って、右手を静子へ向かって伸ばしてきた。静子は本能的に危険を感じて逃げようとする。だが動けない。またもフレイググレースが硬直して、手足が拘束された。
巨大な手に脚体をつかまれて、思わずスーパーヒーローからぬ悲鳴を発してしまっ

「きやあつー」
足が金属の地面を離れた。美少女フィギュアのように軽々と持ち上げられ、空中を上昇してアンクル・ウォッチの大きな顔の前に運ばれる。
静子の身体と変わらない長さの顔の中で、人間をひと呑みにできる歯がバクバクと動き、大音響がワンワンと響いた。
「サンダーフラップスのロイステルバイスと呼んだ方がいいかな。いやいや。私ときみの間では本名で呼ぶべきだろうね。北原静子ちゃん」

予想外の言葉で鼓膜をぶち叩かれて、静子は精一杯の水戸黄門で返した。
「どうして苗字まで知っているのですか? ウオッチランドにまで来たら、苗字は誰にも教えていません」
アンクル・ウォッチの好人物な顔の造形はそのままに、笑みがいやらしい悪意の渦の中に変貌した。
「私は知っているんだよ。なぜなら私はいわゆる北原静子ちゃんのお父様の瀬邊御治だからね」

「静子は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬邊御治という人物と、アンクル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさしく瀬邊御治のもの。」
「な……」
「私は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬邊御治という人物と、アンクル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさしく瀬邊御治のもの。」

「静子は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬邊御治という人物と、アンクル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさしく瀬邊御治のもの。」
「静子は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬邊御治という人物と、アンクル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさしく瀬邊御治のもの。」

「静子は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬邊御治という人物と、アンクル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさしく瀬邊御治のもの。」
「静子は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬邊御治という人物と、アンクル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさしく瀬邊御治のもの。」

北原静子は科学者夫婦の間に生まれた。



母は幼いころに病死した。父親はいくつもの特許による豊かな財産があったので、優秀なシッターとハウスキーパーを雇った。父も忙しなかった。娘との生活を大切に、愛情をそそいだ。静子は不自由することなく幸せに少女へと成長した。不幸は突然訪れた。静子は父の乗車事故に巻き込まれて、脳と神経系を損傷した。父は自分が開発中だったナノマシンを脳の体内に入れて、脳と神経の代替にすることで生命を救った。静子は前例のない治療のために、外出することができず、父の研究所の中で暮らした。いよいよ治療でリハビリが終了するということに、父が交通事故で亡くなった。

父の死後、研究所はいつの間にか、静子の叔父の遺澤静治のものになっていた。叔父と違って静子は血縁はない。父の妹の末だ。静治も優秀な科学者だったが、父には劣ると静子は考えている。静治は父の研究所を乗っ取るだけでなく、静子の法外な見聞となった。そして本来なら外出できるようになった静子を研究所に監禁して、モルモットにしたのだ。

監禁されてから一年がたったころに静子は気づいた。静治が父の研究を犯罪者に売っている。このままでは父の研究の生きた精華である自分も危ないと感じて、密かに製作したロースデバイスサーマーのプロトタイプを使って、研究所の一部を爆破して逃亡したのだ。あてもなくさまよっていた静子は、偶然、日向輝と出会い、サンダークラブに身を寄せた。チームの一員となり、スーパーヒーローのロースデバイスになった。

研究所の爆発は、当然ながら警察の捜査が入った。静子はサンダークラブを通じて、日本を代表するスーパーヒーローチームのジャスティスフォーカスの法律顧問を担当する弁護士事務所を協力してもらい、研究所の破壊は事故ということにした。もちろん静子が普通の人間ではないことも、ロースデバイスであることも、警察には隠した。

後で知ったが、静子のために尽力してくれた弁護士事務所の新長も、日本のスーパーヒーロー黎明期に、口の悪さで評判だった悪徳弁護士と名乗るヒーローだった。だがこのジャスティスフォーカスのメンバーたちは所長に正体を明かしていたのだ。警察の捜査によって、悪徳静治が犯罪組織の協力者であると判明した。しかし爆破された研究所から静治は姿を消していた。静子は叔父を殺してしまったのではないかと心配したが、今に至るまで死体は見つからない。



「実際に、私は静子ちゃんが起こした大爆発で死ぬところだったよ。取引していた犯罪組織に互換の下から救出されて、なんとか生きながらえられた。見ての通り、左目を失った。警察の追及を逃れるために、顔も整形して別人に変えたよ。それだけじゃない。服の上からではわからないだろうが、身体はほとんどが機械化されて、今や立派なサイボーグだよ。アングル・ウォッチの皮肉めがした言葉を聞かされたなら、静子は本気で、静治が生きていること安堵していた。

叔父は自分を監禁して、父の研究を他人に売り渡した。憎んでもあまりある仇敵だ。それでも死なせることは良くない。静治おじさんがアングル・ウォッチなら、ウォッチランドはいつたいたいなんですか？ 異世界に来て、ウォッチランドの守護聖人の力を借りて、どういっつもりですか？」

「静子ちゃんは大きな勘違いをしているんだよ。そうさせたのは私だがね。ほら、後ろを覗いて。アングル・ウォッチが手をひねり、手の中の静子の向きを変えた。眼下に広がる光景に、静子は息を呑んだ。高さ六メートルの石の壁が大きな円形を造り、ドーム状の白い屋根が覆っている。小さなテラロードが石壁にある小さな端門を開けて、中に入り、また端門が閉まった。

「あのミニチュアがウォッチランドだよ。私が造ったんだ。町から見える空は、ドーム天井の映像さ。ここは異世界じゃない。日本国内の某所にある。私が任されている相模の秘密基地の中だよ。」

「それなら、ウォッチランドに住んでいる人たちは何者なの？」

「もちろん市民たちも異世界の人じゃないよ。この数年の間、日本で失踪したことになる人間だよ。私が脳をいじくって自分たちが先祖代々ウォッチランドに住んでいると思いこんでいるだけなんだ。だから日本人なのに中世ヨーロッパみたいな生活をしているんだよ。」

「……でも、それなら、私が開発した物質を縮小する装置で、ウォッチランドの住民は身長二センチほどに小さくしてある。ウォッチランドにいた静子ちゃんもそのサイズだった。」

「でも」

「今は静子ちゃんのサイズを調整して身長一センチにした。つまり私は巨人になったのではなく、以前と変わらず百七センチほどの身長と一緒だよ。ウォッチランドの城壁の高さも、中にいるときには六メートルに見えるが、実際には百一センチほどなんだよ。」

「なんのために、こんなことをしているのですか？」

「ウォッチランド自体は相模のための実験だね。実験をしているうちに思いついたんだよ。ウォッチランドを使って、静子ちゃんを自分の手に戻すことができるの。ただ再会するのはまだ早いなから、スーパーヒーローになった静子ちゃんにふさわしいドッキリを仕掛けたかった。」

「もしかして銀座のトラック事故も、静治おじさんが仕掛けたのですか？」

「さすが静子ちゃんは理解が速いね。ロースデバイスを調子出すために、私が起こした。この計画のためにテラロード君にも協力してもらったんだよ。テラロード君は自分の死を偽装して海外に逃亡した後、私と同じ相模に属している。何年も別人として活動していたが、久しぶりの静治のテラロードを復活してもらったよ。」

「いかにも愉快そうに静治と言葉を交わすアンクル・ウォッチの語り口は、記憶に残る叔父そのものだ。」

「サンライズドッキリの種族がしもすんだから、これからは静子ちゃんに静子ちゃんと呼んでくれるわね。」

「ソツとするほどの巨大な海面の笑み。右手の中の小さな静子に向け。」

「そのためにかわいい静子ちゃんを、もっともかわいい人形にしたんだからね。」

「人形。」

静子自身には股間が見えないが、アングル・ウォッチがじつりと覗きこんで、恥辱の描写をした。

「静子ちゃんのお花はきれいが開いているよ。私に話められて開花したんだね。私の唾液に濡れて、肉茎もクリトリスもキラキラと輝いていて、うらやま踏んだ。これにほのこまった人形だよ。」

アングル・ウォッチが上着のポケットから、薄黒の箱ほどのサイズのケースを出した。蓋を開けると、中に白い綿棒が並んでいる。この特性の綿棒で、静子ちゃんをたっぷりおまかせよう。

動けない静子の顔の前に、一本だけつまみ上げた綿棒の先端を突きつけられる。白い棒がじつりと濡れているのがわかった。

「またいやらしい薬を！」

「これはたまたまのローションだよ。エッチなお店で使っている海軍由来の天然ものだ。すでに静子ちゃんの身体にはたっぷりお薬が浸透しているから、今さら綿棒を使う必要がないからね。」

いかれた叔父がどんつもりで言っているのは知れないが、静子には侮辱と屈辱の言葉でしかなかった。

「そんなことはありません！今さらお薬おさんに身体を話められても、気持ち悪いだけだった！」

それは身体の外側を味わっただけだからだよ。身体の内側は違う。

静子の顔の前から綿棒が消えた。M字開脚の中心へと移動して、しっとり開いた肉花のさらなる中心へと押しつけられる。ローションをまじった綿棒で、狭い膣口がヌルリと押し広げられた。

「きひいいいっ！」

反射的に膣壁がキユッと収縮して、異物の侵入を防ごうとするが、巨人の腕刀には抗えない。綿棒の軸よりも膨らんだ頭の部分が、すほまった膣の中に強引に押し入れられた。

「あへっ！」

テラードに犯されたとき感じた、婦科由来の猛烈な疼きはなかった。最初は無理やりな異物挿入に苦痛の電撃が走った。しかしすぐに膣内がふつふつと泡立つように、暖まない心地よさが生まれはじめる。イメージの中の泡がプチプチと弾けるたびに、快感が飛び散り、愉性が積み重なって増幅していく。

「あふ、はあああ、こ、こんな、うんんっ……はうっ！」

装甲に固定されていない膣がもじもじと震く。呼吸が大きくなるとともに、なめらかな白い膣が盛り上がりは、ペコッとへこむ。M字開脚を作る腓腸の筋肉が、せつなげにブルブルとわなないた。

「ほつら、うた通ったろう。綿棒を入れてただけで感じているじゃないか！」

「違う！違う！違う！あ、んん……はあ……」

アングル・ウォッチが好人物顔にはささわくはない善々しい笑みで、にんまりと姪を見とらした。

「さあ、綿棒を動かすと、かわいいう人形の静子ちゃんはどうなんだろうね。」

言葉とどろ、左手で静子の肩を押さえた。右手の指を器用に使い、綿棒にひねりを加えながら前後に動かしてはしめる。

「あひああああ……タ、ダメえええ、ほつああああ……」

静子の叫びの音色が明確に変化した。体内を乱雑にえぐられ、女肉を暴力的にかき混ぜられ、本来なら苦痛に苛まれるはず。しかし静子の肉体は静子の意志を貫徹し、悦楽を生み出す。綿棒に女性器の中を隠辱されるたびに、湧けるような熱い蜜が膣の奥から湧き上がってくるように感じられる。

「あああ、綿棒なんかに！」

生身のペニスや、男性器を使わずに産卵に犯されるのもつらいが、綿棒という性行為となんの関係もないしろものに、身体をいよいよに腫らしているのも心が削られる。

「このまま綿棒に犯されてっっちゃっ！」

だが、このままではまされなかった。アングル・ウォッチが綿棒を押しこんだまま手を離し、新たな綿棒を取り出した。白い柄が突き出ている女性器のすぐ下の肛門に、もう一本のローションに濡れた先端が押し当てられる。すほまった尻の裏が刺激に反応して、よりきつく閉じた。

「あ、あ、そこは！」

「静子ちゃん、アナルセックスの経験はあるかい？」

「……………」

察えられない。残念ながら、静子は悪魔たちに前だけでなく後ろの肉孔も貫かれた過去があった。これもまた女性入「ハービー」の新しい裏面と書えるだろうか。

「静子ちゃんのお尻が処女でなくて、私はまったく気にしないよ！」

「やめて、あああう！」

硬くすほまった肛門を、一気に突破して、綿棒の形ならんだ頭が尻の中にズブリと入りこんだ。鮮烈な圧迫感が尻の中にわだかまり、張りつめた風船のように弾けそうだった。

「んひいいいっ！」

尻の中で綿棒が軋れはじめ、膣の粘膜をかきまわされる。静子のナノマシン脳のパターヘルスにある多彩な感覚でも表せない感覚が、尻から全身に轟く。

「壊れる！きひいああああ！お尻が壊れちゃっ！」

自分の肉体を破壊される恐怖の叫びが、喉の奥から飛び出た。人間をはるかに超える頑強な肉体を持つフレアや、魔力に濡らされたオセロットとは違い、静子は脳と神経系以外の肉体は普通のハイティーンの少女でしかない。巨人の手で内臓に異物を突っこまれて動かされるなど、どう考えても免除すべき行為だ。それなのに思ひもよらない気持ちよさが湧き出して、冷たい恐怖を溶かそうとする。いつの間にか肛門から膣まで綿棒に貫かれて快感を生み出す器官にされている。

「お尻で感じていていいことか、静子ちゃんに知られてはダメっ！」

「あ、はあああ……うんんっ……はんんん」

膣が頭をのけそらして熱い雫を渡らすのを、叔父が聞き逃さない。手につけた集音機と耳のスピーカーが、小さく柔らかい人形の淫らな声を増幅して伝える。

「ほら、やっぱりお尻で感じている。静子ちゃんも思った通りのかわいいうエッチな人形だよ。」

「違います！あたしは静子ちゃんも思っているような、あひいいいっ！」

今度はフレア人形が動かない。また亀頭の向こうから感嘆られた。
 「自力で登るんだ」
 しかたなく両手で亀頭をつかんで、ロッククライミングのように身体を引き上げた。手を滑らせると、背後のフレア人形の腕に身体を支えられるので、落下する心配はなかった。
 首が亀頭の丸い先鋒の上に出て、見下ろすアングル・ウオッチの目が合っ、生身の眼球が凝っている白目に、偏執的な炎が千つ千つと燃えている。
 視線を下ろすと、眼前の亀頭の中心に縦の筋が走っている。
 「そこだ！ そこに口をつけるんだ！」
 「あああ……」
 静子は両手で亀頭の側面にしがみつき、唇を鈴口に近づける。さっきよりもさらに激烈な男の性根が鼻を襲った。
 「ううう、気持ち悪い……」
 「最初はキスしろ！」
 「熱い！ 臭いっ！」
 命令に従い唇を鈴口につけた。口と鈴口との距離すぎるキス、またしても唇の内側で叫んだ。
 勃起してパンパンに膨らんだ亀頭に、アングル・ウオッチの全身の体熱が集中しているようだ。舌を伸ばして、鈴口の周囲に這わせる。臭いとともに、静子のナノマシン脳が、蓄積する豊富な語彙にもない味が、舌を濡れさせた。



「んんっ、ううう、あふっ！」
 背後のフレア人形が腰を突き上げてきた。腰に入ったままの歯ペニスで、また体内を強くかき乱される。
 「ひゃううううう！ うはタマッ！」
 「それでいい。静子ちゃん私は私の人形と交わりながら私のペニスをしゃぶるんだ」
 「そんな、はううう！ んんっ！」
 後ろからの突きに押されて、静子は腰を亀頭の先鋒押しつけてしまっ。そのまま鈴口の内側に舌を這わせる。縮小された身体でなければできない性技だ。アングル・ウオッチの震音があふれた。
 「おほおほ、いいぞ、それがいい！ 静子ちゃん、もっとやるんだ！」
 「んっ、はうう！ ああああ！」
 後ろからますますフレアの偽物に責められながら、憎んでもあまりある叔父の巨大亀頭に腰を埋めて詰める。恥辱と屈辱の地獄に落とされながら、猛々しい快感が連続して背筋をせり上がって行く。
 「静子ちゃん、静子ちゃん、愛してっ！」と叫んだ
 「そんなで、言えない！ はううう！……あああ、絶対に言わない！」
 「静子ちゃんが言ってくれないと、下にいるワラロード君にウオッチランドの住人を殺戮させるよ。最初はユドルフ市長の目の前で、孫というのにならっている女の子を八つ裂きさせる」
 「ひびい……」
 「言え……」 静子おじさん、愛してっ！と叫びたいっ！」
 今にも切れそうな叔父の形相を目にして、本覚だとわかった。アングル・ウオッチは離れ出すことも躊躇しない人間だとはつまり理解できた。今は控に執着して、いっせいで中絶させよう。
 「あああ、今、聞くしかない」
 静子は決意して、長年の疑念を聞いたした。
 「言います。言いますから、その前に教えて、父さんを死なせたのは」
 「こんな大事なときにも、フレア人形が人工男根を叩きつけてくる。」
 「あひいっ……」 静子おじさんですか？」

「おい。なにがおかしいぞ、どうなっている」

静子はロースデバイスアーマーに指示を送った。アーマーの左腕が肘から分離して空を飛び、テラーロイドを床からつまみ上げた。そのまま、ムラ根の上の静子の前に運ばれてくる。

テラーロイドは今も身体二センチあまり、対する静子は二十センチ。それでもテラーロイドは静子を見上げて、傲慢に言い放った。

「きさま、なにをしたんだ。こうなうたらぶっ殺して、おわっ！」

静子は無言で自分の十分の一サイズのテラーロイドをつかみ上げ、つかつかとアングル・ウォッチの血まみれの股間に近づいた。

「なにをする！ 離せ！ うわあああああ」

テラーロイドを黒い霧を先にして、アングル・ウォッチの肘に押しこんだ。反射的に肘関節が締まり、黒い甲冑の足の先まで尻の中に呑みこまれて、殺人鬼の全身が叔父の尻の内部に消える。

「これが本場のくそくらえです」

静子は視線を叔父の肛門から、たなずむフレア人形へ向けた。ロースデバイスアーマーの右腰から取納されている銃が現れ、腰にマウントしたまま、視線を的にしてレーザーを放った。フレア人形が一瞬で燃え上がり、悪人そっくりの姿面が溶けて、中の機械が粉砕される。

（あたしがフレアの偽物と交わったのは、絶対に秘密にしておくはならないわ）

☆

秘密基地の管理システムを支配した静子の働きによって、アングル・ウォッチとテラーロイドをはじめとして基地にいた犯罪組織の構成員たちは、それぞれの部屋に閉じこめられて無力化され、捕縛された。

フレア、スターサンダー、オセロットはマンフロイ部隊から解放された。ウォッチランドの住居にされていた人々は、緊急入院したアングル・ウォッチの助手たちによってもの大きさに戻され、与えられていた捏造記憶を消去された。それと同時にウォッチランドにいたきことは記憶から消えたために、誰一人として静子の名前も録も覚えていなかったのは、静子にとって幸いだった。また瀧澤郷治が静子を捕える計画は組織に無断で行ったプライベートなもので、静子がロースデバイスだということは組織の誰にも教えず、警察にも告げなかった。後に面会に行った静子に、瀧澤は「家族だけの秘密だからね」と囁いてニヤニヤ笑った。

静子が心配したテラーロイドのコンピューターを操る能力は、限定的なもので、現在のネットを支配できるようなものではなかった。

警察の調査によりアングル・ウォッチと瀧澤郷治が研究所時代から協力していた犯罪組織が、アメリカの巨大組織犯罪国家たわわり、秘密基地から得られた情報をもとに警察庁とFBI合同で捜査がはじまっている。

☆

静子はロースデバイスの姿で警察での証言を終え、公衆トイレの個室で北原静子に戻り、銀座でちょっとお高めのガラスのオアシエを購入した。

サンダー・クラブスの巨宅兼基地に戻ると、オアシエを予定通りに自分の私室の棚に置いた。窓からの陽光を受けて、組み合わさった大小の面々が複雑に反射させる。

「どういふアートはよくわからないけど、これはきれいね」

並んでオアシエをながめる日向燦の言葉に、静子はうれしそうに答えた。

「これを貰ったのは、ウォッチランド事件ははじまったの、後始末で忙しかつたけれど、やっぱり貰うことができた」

二人で並んでガラスの輝きを見つめあう間に、静子は燦の手を握り、無言でキスを求める表情になる。

燦はすぐに笑っていて、顔を静子の唇に接した。

Illustration by 緑木邑

